

2009-7-1  
朝日新聞 夕刊

第3種郵便物認可

beアート

# 人生の贈りもの

## 技術者も教官も現場を知らない

「失敗学」提唱者 畑村洋太郎(68)

3

——戦没学生らの遺稿集「きけ わだつみのこえ」を東大入学後に読み、考えが一変したそうですね

同じ年頃の人間が死んでいく。しかも、やりたいことがあるのに。それが痛烈だった。「やりたいことに気づいたら、懸命にやりなさい」と言っているような気がしました。それに比べ、「自分はあまりに、いい調子でやってきた。おかしいぞ」

と。がぜん、勉強する気になりました。寝る間ももつたいなくなりました。工学や数学からはじまり、経済、経営、哲学、外国語……、大事そうに

戦の時代だったから、日本は将来、ソ連と戦うことになるかと考え、敵の言葉をわかるようにロシア語も勉強しましたが、何の役にも立たなかつたよ、ハハハ……。でも、経営や経済は失敗学に役立っています。

見えないから、機械の方が向いている」とアドバイスしてくれた。

自前の技術を育てる企業に就職しようと考えていた。ゴツくて動くものをつくりたかったので、建設機械を製造している日立製作所がちょうどよかったですね。

手になりましたね

「大学でも、現場から考えることが必要だ。だが、現場を知っている教官がいない」と説得された。



「形があり、目で見えるものを勉強しよう」と東大では機械工学を専攻した

何かを作れたかったので工学部に進み、電気工学か機械工学かと思つたが、事情がわからない。それで電気工学の教官に相談しました。もともと目で見えるものでないと面白くないところがある。教官は「電気は

けんかっ早いので、配属先の工場長は心配して、「口先だけでは、ろくな技術者にならない。現場を知らないといけない」と、作業員をやらせてくれました。「大変なことだけやらせろ」と指示が出ていて、日誌を提出すると、工場長は赤のボールペンで返事を書いてくれた。基礎教育だったんだね。入社1年後、重機の設計を自由にやらせてくれました。

——2年勤務して東大工学部の助

(聞き手・平出義明)